

[招待論文]

# 慶應義塾史に見るスポーツ

## History of Sports at Keio University

山内 慶太

慶應義塾大学看護医療学部・大学院健康マネジメント研究科教授

Keita Yamauchi

Professor, Faculty of Nursing and Medical Care,  
Graduate School of Health Management, Keio University

**Abstract:** 福澤先生は、「身体健康精神活発」の書幅が象徴するように、健康を重視し、自らも運動を熱心に行う人であった。それだけに慶應義塾は、草創期から塾生の健康と運動に留意して来たが、明治 25 年に体育会を創立、各部は日本のスポーツの発展にも大いに貢献して来た。また、野球の早慶戦は日本のスポーツ文化と早慶両校の学生文化の醸成に大きな役割を果たして来た。慶應義塾のスポーツは、小泉信三ら社中の尽力によって守られ、発展して来たが、今日では、研究・教育機関なども拡充しており、その果たすべき役割は更に大きくなっている。

Yukichi Fukuzawa placed emphasis on health and was himself an individual who engaged in high amount of physical activity. Therefore, Keio University has placed emphasis on the health and physical activity of its students since the early years of its founding. Keio Athletic Association was founded in 1892 and the various clubs have largely contributed to the development of sports in Japan. Additionally, the Waseda-Keio Baseball Games have played a major role in cultivating the Japanese sports culture and the student culture for both Waseda University and Keio University. Sports in Keio University have been preserved and developed due to the efforts of Shinzo Koizumi and a lot of alumni. In recent years, research and educational facilities regarding sports have further expanded and the roles it plays have become more extensive.

**Keywords:** 福澤諭吉、小泉信三、体育会、早慶戦、学生スポーツ

福澤先生は、健康の維持増進を重視し、その為にも運動の意義を一早く認め、自らも、また慶應義塾の教育においても実践した人であった。もともと緒方洪庵の下、医学や科学の本で蘭学を学んだのであるから、医学への理解の深い人でもあった。実際に、著作の中で、比喻として身体や病気を取り上げることも多く、洪庵の訳書にはじまる「健康」という言葉も先生の著作を通じて日本中に広まったと言われている程である<sup>(1)</sup>。

したがって、慶應義塾では古くから塾生の健康に留意し、スポーツも盛んであった。それは体育会各部の歴史を見れば明らかで、各種のスポーツで、我が国における普及に大きな役割を果たして来た。そしてまた、野球の早慶戦を中心に、日本のスポーツ文化と慶應義塾の学生文化の醸成にも大きな役割を果たして来た。

慶應義塾体育会は平成 29 (2017) 年には創設以来 125 年を迎える。また、自ら庭球部の選手として活躍し、学生スポーツの良き理解者でもあった小泉信三は来年 28 年に没後 50 年を迎える。このような節目の時期を控えて、慶應義塾とスポーツの関わりについて考えてみたい。

## 1 福澤先生と健康

### 1.1 晩年の運動 ー散歩、米搗ぎ、居合一

「乙未元旦遊箱根」

亦是書生物外情 (亦是れ書生 物外の情)

屠蘇乘醉出京城 (屠蘇酔に乗じて京城を出づ)

踏来八里函山雪 (踏み来る八里 函山の雪)

占得一年行楽清 (占い得たり 一年の行楽の清きを)

明治 28(1895) 年、丁度 120 年前、二回り前の乙未の正月に福澤先生が書いた漢詩である<sup>(2)</sup>。一月一日、三田の福澤邸に新年を祝う客が集まる中で、石河幹明らからこれから箱根に行くと言った先生は、自分もと言って他にも同行する者を誘い、即座に箱根に出発、福住旅館に一泊した後、翌二日は、湯本から沼津まで徒歩で一気に越えたのであった。その間、先生は先頭で、箱

根の昔話を語りながら歩いているのに、余りの速さに、他の者は時々小走りで追い付くので精一杯、途中で発熱した者、途中から馬車に乗った者、一緒に踏破したもののその晩発熱した者など、皆「これでは保養どころか、身体を壊してしまう」とぼやいたり、夜遅くまで沼津在住の塾員らと談笑を愉んでいる先生の壮健さに驚いたりしたという<sup>(3)</sup>。一緒に行った者は皆30代、先生満59歳の時の話である。



図1 塾生との散歩姿(明治32年)  
(慶應義塾福澤研究センター所蔵)

このように先生は、晩年まで体力も気力も充実していたが、明治3年に発疹チフスの大病をして以来運動に熱心で、朝の散歩、米搗き、居合抜き等を行っていた。晩年の日課を見ると、朝1時間程度散歩をし、夕方には約1時間米搗きか居合抜きをしていたようであるが、居合は時に「数抜」も行い、明治28年12月31日には、午前8時半から午後1時まで休息なしで千本抜いたという記録も残っている<sup>(4)</sup>。米搗きは、木の臼と杵を用いて玄米の精白をするのであるが、生涯で四つの臼を潰している程であるからこれも相当の運動であった。

なお、先生は、米搗きと居合について、明治23年7月8日付の山口広江宛書簡で「小生も幸に無異、唯今にても米をつき、又少年の時中村庄兵衛先生に学び得たる居合を以て運動致し」と記している<sup>(5)</sup>。自ら「運動」と認識していたことがわかる。

## 1.2 塾生の健康

福澤先生自らが、このように健康に関心が高くまた自らも運動に熱心であったので、慶應義塾も塾生の健康に留意すると共に運動を奨励した。例えば、先生直筆の慶應義塾二十五年史とも言うべき「慶應義塾紀事」には次の一節がある<sup>(6)</sup>。

「身体の運動は特に本塾の注意する所にして、課業の時間は三時間より四時間を過るを許さず。又数年前より邸内に、柔術の道場を設けて専ら体育を励まし、又近日は之に居合を交え、時としては剣術なの戯を為さしむ。蓋し塾中に病者の少なきは、塾の地位市中高燥の部分に在ると運動法のしか然らしむものならん。」

しかも、これは、「学規之事」と題された章の中で、「本塾の主義は和漢古学流に反し、仮令たとい文を談ずるにも世事を語るにも西洋サイヤンスの実学を根拠とするものなれば、常に学問の虚に走らんことを恐る。(以下略)」という、実学に敢えて「サイヤンス」とルビを振って、義塾の実学を説明する段落に引き続いて記されていることは、先生が身体の運動についても真に注意していたことを示唆していよう。

実際に、三田に移転する前の芝新銭座時代、「慶應義塾之記」の付録の「食堂規則」の一カ条には「午後晩食後は、木のぼり、玉遊び等「ジムナスチック」の法に従い種々の戯れいたし、勉て身体を運動すべし。」と記されている<sup>(7)</sup>。狭い敷地内にも「運動場」を設けて、年少の塾生の為にブランコやシーソーも備えていた。年長の塾生には別に運動を勧め、折々には先生自らが塾生を引き連れて遠足をしていた。また、医務室も既に設け、近藤良薫、安藤正胤らが今でいう校医の役目を果たしていた。

### 1.3 「身体健康 精神活発」

このような日々の生活、そして慶應義塾での実践からも、健康と運動を重視していたことは明らかであるが、「老生の心には諸子が半死半生の色青ざめたる大学者となるよりも、体格屈強なる壮年たらんをこそ願う」<sup>(8)</sup>と塾生や自らの子供に語った先生であったので、著作の中にもその考えが表れている。

晩年の著作『福翁百話』の三十一話「身体の發育こそ大切なれ」の末尾の「先ず獸身を成して後に人心を養えとは、我輩の常に唱うる所にして、天下の父母たるものは決してこの旨を忘るべからず」は有名であるが<sup>(9)</sup>、それ以外にも色々と見出すことができる。

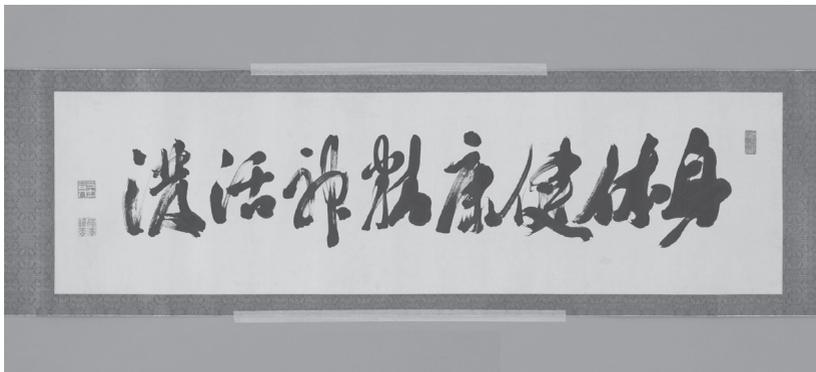


図2 福澤諭吉「身体健康精神活発」墨書（慶應義塾福澤研究センター所蔵）

例えば、『通俗民権論』では「第八章 諸力平均之事」において、智力、財力、一身の品行、身体の健康と、「諸力平均」したバランスがとれてはじめて、民権を拡張して国権に影響を及ぼし、独立国の体面を全うできるとしている<sup>(10)</sup>。当時のいわゆる自由民権運動家がこれらのバランスに欠けることを指摘してのものであるが、「第七章 身体を健康にすること」においては、「智恵遅くして身体の虚弱なるは、蒸気強くして釜の薄弱なるが如し。無理に蒸気を用いんとすれば忽ち釜の破裂することあるべし」と、身体の健康の必要をわかりやすく述べている。そして、西洋風の体操の方法もあるが、全国で広く一般に行うには各地方の風俗に従って、剣術、角力、遠足、水泳等の運動に努めるのが良いと語っている。そして、家が貧しくその時間の余裕が無ければ、「米を搗くも可なり、薪を割り水を汲むも可なり。少なくとも每日一、二時間は必ず全身に汗する程に働かんことを要す。」と述べたのである<sup>(11)</sup>。

更に、子供向け科学読本とも言うべき『訓蒙窮理図解』では、日本中の少年達に、次のように語りかけたのであった<sup>(12)</sup>。

「嗚呼世間の少年等、学問は生涯せよとの諺もあるに、何故斯くも不精なるや。人の人たる所以を知らば、無所惜、身を役し、無所憚、心を勞し、徳誼を修め知識を開き、精心は活発、身体は強壯にして、真に万物の靈たらんことを勉べし。」

日本全国の少年への愛情が感じられる文章であるが、同時に、「こころはいきいき、からだはじょうぶ」のルビのセンスにも驚く一節でもある。「身体健康精神活発」と揮毫した書幅も残っている。

## 2 慶應義塾体育会と早慶戦

### 2.1 体育会の創立と発展

明治4年に三田の地に移転してから、次第に塾生の有志が集まって、各種の同好のクラブが出来始めた。その中で、10年頃には、剣道や柔道を学ぶ者が始めて盛んになって行く。また、例えば、野球は17年には青山英和学校と既に対戦しており、21年に三田ベースボール倶楽部の発足に至る。端艇部は22年に芝浦で練習しはじめたのがきっかけで端艇倶楽部発足となる。

このように、塾内に様々なスポーツ団体が生まれ、盛んに活動をするようになって来たことから、組織的に統一する為に、明治25年に作られたのが慶應義塾体育会である。剣術、柔術、野球、端艇、各部を所属させると共に、新たに弓術、操練（兵式体操）、徒歩の各部を設け7部で発足した。その後、操練部と徒歩部がなくなり、様々な部が漸次加わることになった。明治末年時点で言えば、柔道、剣道、弓術、端艇、水泳、野球、蹴球（ラグビー）、庭球、器械体操の9部である。

体育会各部の歴史を見ると、日本におけるルーツ校であるラグビーやホッケー、軟式から硬式にいち早く転換したテニスをはじめ、各部は競技の普及並びに発展に大いに貢献して来た。その発展においては、英語の教員であったクラークと英国で学んだ田中銀之助が指導した蹴球部、聖アンデレ教会のアイランド人牧師グレーから指導を受けたホッケー部をはじめ、継続して指導を受けながら欧米の技術の導入に努めた部がある。また、明治40年にはハワイ・セントルイス大学を招き、41年にはハワイに遠征、44年にはアメリカ本土に遠征し36試合を行った野球部のように、直接の往来で発展した部もある。

いずれにしても、早くから言わば欧米の本場の指導やプレイに触れたことと義塾の気風が相まって、当時の日本のスポーツ界にありがちな偏った

精神主義に陥らなかったのは、当時の義塾のスポーツの特色と言って良いであろう。例えば、大正 15 (1926) 年から昭和 9 (1934) 年まで野球部の監督を務め黄金時代を築いた腰本寿は、ハワイ生まれでもあったので、アメリカの野球に通じていた。その結果、早稲田大学が飛田穂洲による野球道とでもいうべき精神野球の祖となったのに対し、義塾野球部は精神主義に偏ることなく、当時の部員の言葉によれば「近代的科学的野球をいち早くとり入れ」(水原茂)、「合理主義をモットーとしていた」(牧野直隆) のである<sup>(13, 14)</sup>。

## 2.2 早慶戦の人気

明治 36 年 11 月 21 日、早稲田大学からの挑戦状を受けて、綱町運動場で野球試合が行われ、11 対 9 で義塾野球部が勝利した。これが第 1 回の早慶野球試合である。翌年には、早慶共に当時の野球界の覇者一高を破り、早慶一時代から早慶時代となり、両校の塾生・学生だけでなく世間の注目を集めることになった。これを端緒に、野球部だけでなく体育会各部で早慶戦が行われるようになり、その勝利が日本一以上に重要な目標となって今日に至っている。

野球の早慶戦では組織的な応援も間も無くはじまり、38 年秋の試合で既に、慶應側が KO の人文字を作れば、早稲田は WU の小旗を振って応援するという具合だった。ただ、応援の過熱から、39 年秋、一勝一敗となったところで中止となり、大正 14 年 10 月の復活まで早慶野球戦は行われなかった。六大学野球リーグ戦の開始と共に早慶戦も復活するが、義塾野球部は昭和 3 年秋の 10 戦全勝優勝で黄金時代を迎え、早稲田も戦力充実、実力は伯仲した。これに、ラジオの実況放送の開始、神宮球場の増改築、両校の気質の違いを反映する応援合戦のよって、天下を二分する人気となった。

神宮球場改築は東京六大学野球連盟が全額負担して行われたが、改築後最初となる昭和 6 年春の早慶戦は更に盛り上がりを見せた。当時の東京日日新聞は試合前から「応援戦術芸術化」等の見出しで記事を載せ、第一回戦後、「リズムミカル応援合戦」の見出しでこう報じた<sup>(15)</sup>。

「バンドを擁す組織を確立した両応援団は、田村（慶）溝口（早）リーダーのタクトで互いにエールを交換、紳士の協定がよく実行され、バンド奏楽は悪野次を吹っとばし合唱一拍手一応援がリズム化し効果百パーセント、敵勢に応じて戦術の妙をつくし、この応援戦は正しく五分と五分、慶應が軽快な気力で押せば、早大が豪強な底力でこれを迎え、早に荒削りの頑健あれば、慶に近代的な明朗がある。」

このように人文字、ブラスバンドの応援から、戦後のトンガリ帽子による応援、バトンガールによる応援と早慶戦から広まった応援は多い。半世紀前にはじまった早稲田の「コンバットマーチ」と慶應の「ダッシュケイオウ」が高校野球からプロ野球まで全国至るところで聞くことができるのはその最たるものである。

### 2.3 早慶戦とスポーツ文化、学生文化

早慶戦の意義の大きさを考える時、言及しなければならないのは、戦後間もなく行われた復活早慶戦であろう。昭和20年10月28日、OB選手も含めた全早慶戦が開催された。その日のことを神宮球場長の伊丹安広は、「復員した選手に、先輩を加えて行われたオール早慶戦は、神宮球場における野球復興の第一戦ばかりでなく、わか国における戦後野球の第一戦でもありました」と回想した。そして、この全早慶戦は、野球関係者だけでなく、敗戦に打ちひしがれた国民に、新しい時代の到来を感じさせるきっかけともなった。例えば、後に、義塾に入学して体



図3 早慶戦は子供達の憧れ、『野球少年』表紙（昭和22、23年）（筆者所蔵）

育会バレーボール部で活躍、ミュンヘンオリンピックの優勝監督にもなった松平康隆は当時旧制中学の四年生であったが、三塁側で観戦している。そして、満員のスタンドに、「生きている、ああ、死ななくてすんだ」と感じ、「私に終戦を一番実感させてくれたのが、あの早慶戦だった」と後に語っている<sup>(15)</sup>。

なお、この復活早慶戦は、キャンパスの雰囲気にも良い影響を及ぼした。敗戦後、日々の暮らしで精一杯の塾生達がどうしたらキャンパスに戻って来るか、五島岩四郎をはじめとする当時の義塾応援指導部員達は思案していた。そのためには、早慶戦が一番良いと考え、両校野球部関係者の話からはじまったこの全早慶戦を「学園復帰運動」と位置付け、この実現に尽力したのであった。そして、この動きが、戦後の復興に大きな役割を果たした、その後の義塾創立九十年祭へとつながって行くことになる。

二度も映画になった出征学徒壮行の「最後の早慶戦」、そして敗戦直後の復活早慶戦は、早慶両校の学生、塾生の胸中に早慶戦が如何に大きな存在であったかを端的に示している。毎年の日常の早慶戦の積み重ねが、このような非日常の早慶戦で人々に大きな力となったのであろうし、その回想が当時を知らぬ者の心にも響くのであろう。

両校の学生文化を考える時に忘れることの出来ないのはカレッジソングである。「若き血」（昭和2年作）、「丘の上」（昭和3年作）、「慶應讃歌」（22年作）をはじめとするカレッジソングの殆どは早慶戦と共に作られ、その応援を通じて世代を越えて義塾社中の心に刻み込まれていることも指摘しておきたい<sup>(16,17)</sup>。

なお、ここでは野球の早慶戦を特に取り上げたが、野球の早慶戦が端緒となって、各競技で早慶戦がはじまり、体育会各部にとって早慶戦は大きな意味を持つものになっている。また、多くの早慶両校の学生・塾生、校友・塾員には、野球の早慶戦の応援がきっかけとなって、各部の早慶戦に関心が広がり、応援に行くようになる人も多く、その意味でも早慶野球戦の持つ意義は大きいものがある。

### 3 小泉信三とスポーツ

#### 3.1 「スポーツが与える三つの宝」

小泉信三の「練習は不可能を可能にす」という言葉は、慶應義塾内に留まらず、スポーツ界で有名である。これは、東京オリンピックを2年後に控えた昭和37年6月、日本体育協会主催のオリンピックデー大会において「スポーツが与える三つの宝」と題して講演した中の一節である。更に、同年10月26日、慶應義塾の日吉記念館において行われた慶應義塾体育会七十周年式典の記念講演においても同趣旨のことが語られた<sup>(18)</sup>。

小泉は「スポーツが与える三つの宝」は、第一に「練習の体験を持つということ」「練習によって不可能を可能にするという体験」であると言う。第二に、「フェアプレーの精神」を挙げる。そして「フェアプレーというのは何かといえば、正しく戦え、どこまでも争え、しかし正しく争え、卑怯なことをするな、不正なことをするな、無礼なことはするな、こういうことです」と語り、Be a hard fighter and a good loser!を紹介し「果敢なる闘士であっていきぎよき敗者である」と言う。第三が「友<sup>のぶきち</sup>」である。

小泉は、父信吉を幼くして喪うが、信吉が福澤先生の高弟でもあったことから、父の死後、一家は福澤先生の庇護の下で育った。そして、明治35年、義塾の普通部に入学するとテニスに熱中し、普通部生にして既に義塾庭球部の大将として活躍したのであった。小泉がテニスを始めた当時、勢力の中心は東京高等師範学校、東京高等商業学校であった。そこから、37年秋、義塾庭球部が高商に勝利し、高師、高商、慶應、早稲田の四強時代に移るのであるが、その時に大将として活躍したのが小泉であった。四校時代に入るとテニスの人気は高まり、

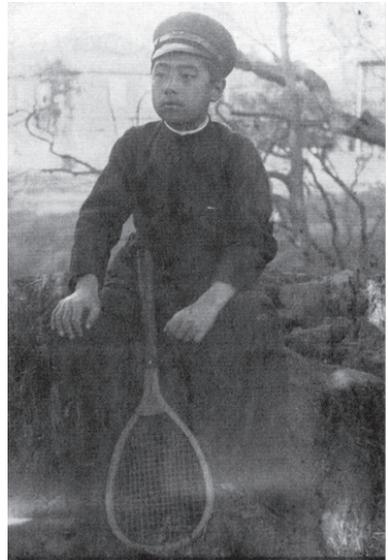


図4 普通部2年、庭球部に入部間もない頃の  
小泉信三(明治35年頃)  
(慶應義塾福澤研究センター所蔵)

小泉の活躍もしばしば新聞に取り上げられた。例えば、第一回早慶戦を報じる明治 37 年 10 月付時事新報は「小泉の後衛は間然する処なく熱球の飛ぶこと銃丸よりも強く」と記している<sup>(19)</sup>。また、『日本画報』第 32 号(翌 38 年 10 月 10 日付)には、小泉の選手姿の写真が掲載されている。

その後、大学部に進学した頃から、興味がテニスから学問へ傾斜して卒業後理財科(後の経済学部)の教員となる。そして、英国、ドイツ等への留学を経て経済学部の教授となった小泉は、庭球部長も務めることになった。旺盛な著作活動の一方で、部員に対しては「ただ常に彼等と共に在る」ことを大切にされた。そして、部長時代に、義塾庭球部は早稲田の黄金時代に終止符を打ち「庭球王国慶應」と称されるまでになったのであった。「スポーツが与える三つの宝」は、庭球部員、庭球部長としての小泉自らの体験に裏打ちされた演説なのであった。

### 3.2 スポーツの意義

昭和 8 年、小泉は塾長に選ばれ、以後 14 年間に亘ってその職にあった。前述の「スポーツが与える三つの宝」の演説が示すように、小泉は学生スポーツの意義を良く理解し、塾生を良く励ました人であった。

例えば、体育会の部員に対しては、「わが体育会伝統の美風」として、スタンド・プレー、すなわち観衆など周囲の人々の目を惹こうとする、歡心を買おうとするプレーを嫌う誠実な姿勢について、次のように説明している<sup>(20)</sup>。

「スタンド・プレーをしないということは、一面においては偏えに己れの本分を守り、良心の命ずるところに忠なる謙虚の心に発し、他面においては昂然として衆俗の批評を無視する強固なる自信に発している。(中略)選手として観覧席の喝采を迎うるに慣れたる者は、やがてその生涯を通じてただ他人の批評にのみ喜憂し、ただ世間の人聞きのいいことばかり心がけて操守なき一生を終るであろう。」

早慶戦の応援についても、後に次のように語っている<sup>(21)</sup>。

「両校の応援学生数万人が声をからして母校の歌を歌うということも、彼等の学生生活を張りのあるものにするであろう。(中略)かりに対校競技に熱中した体験を持たずに終わった学生生活は、学生生活というに値しない。というものがあってもそれはさほどの言い過ぎとは思われない。たかが運動競技などというものは、出世主義の秀才あたりの言い草にすぎない。」

小泉の塾長時代は、次第に戦時色が強くなる困難な時代でもあった。そして、学生スポーツへの軍部や文部省の圧力が強くなると、例えば六大学野球連盟は、各大学の学長中で最も野球の理解者である小泉に対処を依頼し、小泉は、体育審議会等で、敢然と軍部と文部省に対して反論したのであった。



図5 六大学野球始球式でストライクを投げる小泉信三  
(昭和40年)(慶應義塾福澤研究センター所蔵)

#### 4 その後の慶應義塾とスポーツ

慶應義塾は、福澤先生の時代からスポーツの価値を理解し重視して来た。そして、小泉信三をはじめ、多くの義塾社中の人たちの尽力で今日まで体育会が発展して来たと言える。今日では、体育会に所属する部は41に及んでいるが、体育会各部の部員と出身者が我が国の各種スポーツの発展に大いに寄与して来た事は言うまでもない。しかし、それ以上に、OBの熱心なそして無償の協力によって、卒業後実社会で活躍する有為な人を涵養し続けて来たことは強調しなければならない。

また、慶應義塾におけるスポーツに関する組織としては、日吉における体

育教育の拠点となっている体育研究所（昭和36年発足）、スポーツ医学の研究と共に体育会学生やスポーツ選手の医学的支援を行っているスポーツ医学研究センター（平成元年発足）があり、大学病院の診療部門にはスポーツ医学総合センターがある。教育機関としてはスポーツマネジメント専修を持つ大学院健康マネジメント研究科（平成17年開設）がある。また、湘南藤沢キャンパスでは、健康マネジメント研究科だけでなく、総合政策学部、環境情報学部、政策メディア研究科でもその学際性を活かしてスポーツに関する研究も活発に行われている。

今日では、スポーツへの期待は更に大きいと共に、要求もまた大きくなっている。その中で、学生だけでなく、子供から大人まで、それぞれの年代、発達段階に応じたスポーツと健康教育を考える上では、幼稚舎・横浜初等部から大学に至るまで一貫教育の各段階での経験と模索の蓄積は貴重である。また、超高齢社会への対応を考える時、老後のレジャーとしてのスポーツ、機能低下を遅らせる為のスポーツについても研究と実践が求められ、義塾の各関連機関の役割は大きい。

一方で、本論文で言及した学生文化を担う学生スポーツの役割も益々大きいものがある。インターネット上で世界中の講義が受講できるような時代になりつつある中で、学生がその学校の学生としてのアイデンティティを持つ為に如何にしたらよいかは、各大学の喫緊の課題である。その点では、早慶両校にとって早慶戦の応援の場は貴重である。

今日の学生スポーツ界は、少子化の中での大学生生き残りの為の学校広報の媒体となっている感がある。各種の大会で好成績を挙げている大学を見ると、優秀な選手を集めるだけでなく、科学的な練習、科学的な栄養管理も益々積極的になされるようになってきている。そのこと自体は悪いことではないが、部員が科学的根拠を理解して自らが判断するのではなく、作られたメニューに従っているだけだとすると、教育機関でのスポーツとしては不十分であると言わざるを得ない。

福澤先生以来、慶應義塾の教育で重視して来たのは、「独立自由にしてしかも實際的精神」<sup>(22)</sup>つまり、独立の気概と科学的精神を持ち合わせた人の育成であった。その意味でも、慶應義塾には、学生スポーツならではの真の科学的

---

練習の在り方を模索し実現することが求められているのではないだろうか。

福澤先生は、目的を忘れた体育重視に対して警鐘を鳴らしたことがある。明治26年3月22日の時事新報社説「体育の目的を忘るゝ勿れ」において、全国の学校でも学生が体育を重んじるようになってきたのは喜ばしいことではあるが、その目的を忘れてはならない、その目的は「身体を練磨して無病壯健ならしむれば随て精神も亦活発爽快なる可きは自然の法則にして、身心ともに健全なる者は能く社会万般の難きを冒して独立の生活を為すことを得るの利あるが為めのみ」であると語った<sup>(23)</sup>。しかしながら、世間の「体育熱心家」を見ると、身体発育が人生の大目的となってしまう、腕力抜群の称を得られればそれで全て終わりともでもいうような感があると、「世間の体育論者の中に往々其目的を誤解する者少なからざるを見て、一言以て反省を促すのみ。」と批判したのであった。

## 参考文献

- (1) 山内 慶太「2003年読書アンケート」『福澤論吉年鑑』30号、2003年、169頁。
- (2) 『福澤論吉全集』再版、20巻、岩波書店、1971年、435頁。
- (3) 富田 正文『福澤論吉の漢詩三十五講』福澤論吉協会、1994年、227-229頁。
- (4) 「居合数抜記録」『福澤論吉全集』再版、第20巻、岩波書店、1971年、395-396頁。
- (5) 『福澤論吉書簡集』6巻、岩波書店、2002年、319-322頁。
- (6) 『福澤論吉著作集』5巻（西川 俊作・山内 慶太編）、慶應義塾大学出版会、2002年、63頁。
- (7) 『慶應義塾百年史』上巻、慶應義塾、1958年、259-260頁。
- (8) 「明治二十五年一月二十五日慶應義塾幼稚舎にて」『福澤論吉全集』19巻、岩波書店、昭和46年、437-438頁。
- (9) 『福澤論吉著作集』11巻（服部 禮次郎編）、慶應義塾大学出版会、2003年、78-80頁。
- (10) 『福澤論吉著作集』7巻（寺崎 修編）、慶應義塾大学出版会、2003年、137-139頁。
- (11) 『福澤論吉著作集』7巻（寺崎 修編）、慶應義塾大学出版会、2003年、132-136頁。
- (12) 『福澤論吉著作集』2巻（中川 眞弥編）、慶應義塾大学出版会、2002年、4頁。
- (13) 水原 茂「腰本寿」『別冊太陽 慶應義塾百人』平凡社、1980年、161頁。
- (14) 牧野 直隆『ベースボールの力』毎日新聞社、2003年、59-62頁。
- (15) 山内 慶太「慶應義塾史跡めぐり（第83回）神宮球場」『三田評論』1171号、2013年、52-55頁。
- (16) 山内 慶太「慶應義塾史跡めぐり（第18回）大公孫樹と「丘の上」」『三田評論』1106号、2007年、52-55頁。
- (17) 山内 慶太「慶應義塾史跡めぐり（第60回）中庭と慶應讃歌」『三田評論』1159号、2011年。
- (18) 小泉 信三『練習は不可能を可能にす』（山内慶太、神吉創二編）、慶應義塾大学

- 出版会、2004年、126-133頁。
- (19) 山内 慶太・神吉 創二・都倉 武之編『アルバム小泉信三』慶應義塾大学出版会、2008年、20頁。
- (20) 小泉 信三『練習は不可能を可能にす』（山内慶太、神吉創二編）、慶應義塾大学出版会、2004年、162-164頁。
- (21) 小泉 信三『練習は不可能を可能にす』（山内慶太、神吉創二編）、慶應義塾大学出版会、2004年、206-207頁。
- (22) 『慶應義塾百年史』中巻（前）、慶應義塾、1960年、208頁。
- (23) 「体育の目的を忘るゝ勿れ」『福澤論吉全集』14巻、再版、岩波書店、1970年、18-20頁。

〔受付日 2015. 1. 27〕